「津波に対し恐怖心」

ジャワ支援 AMDA派遣員帰国

ジャワ島南岸で住民の治療に当たる渡辺看護師（左から2人目、AMDA提供）

インドネシア・ジャワ島南岸を襲った津波の被災者支援に当たっていた国際医療ボランティアAMDA（岡山市）の派遣メンバー三人が三日、同市内で帰国会見し、「海岸の建物は失われ、住民の津波に対する恐怖心は大きい」と述べた。

調整員の館野和之さん（四三）＝岡山市、看護師の渡辺美英さん（四七）＝長野市＝と向井信子さん（二九）＝大阪府泉南市。津波発生翌日の七月十八日から八月二日まで派遣され、最大の被災地パンガンダランなどで治療や破傷風の予防接種に当たった。

館野さんらは、家屋やホテルが倒壊し、漁船が打ち上げられていた惨状を報告。津波の恐怖からパニック状態で高台に逃れ、山の斜面で寝そべって避難生活を送っていた住民の姿も伝えた。

避難時に切り傷を負ったケースが目立ち、館野さんらは「医療施設が機能せず満足な手当てを受けていない住民もおり、衛生状態は悪化していた」と指摘した。

今回の津波では約六百三十人が死亡、約五百四十人が負傷したとされる。菅波茂代表は「今後は現地支部と協力し、保健センターの復興に取り組みたい」と話した。

（臼杵正純）